

POWER SHIFT 2011 参加報告書

0. 取材概要



日程：2011年4月15日～4月18日

取材内容：米国 POWER SHIFT 2011 における Campus Climate Challenge キャンペーンの事例取材

取材地：アメリカ合衆国、ワシントン DC、E コンベンションセンター
(Walter E Convention Center, Washington D.C., USA)

担当者：牧瀬翔麻、山下梓（以上2名）

1. POWER SHIFT 2011 と Energy Action Coalition

POWER SHIFT とは2年に1度、米国の首都ワシントン D.C.で開催される、国内最大規模のユースの気候変動サミットを指す。サミット期間中は全米 50 州から 1 万人以上の学生が集まり、クリーンエネルギーの創出意義、実現方法等について、



国家政策、またはローカルコミュニティにそれぞれ根差した観点から議論する。主催団体 Energy Action Coalition(以下 EAC)は、2004 年、米国約 50 のユースの環境団体および社会運動団体の連携によって共同設立された。”Environmental Justice (環境的正義)”と”Climate Justice (気候的正義)”を理念に掲げ、気候変動問題解決のための、多様かつ包括的な取り組みの提案・普及を行っている。具体的には個人々の投票権の持つ影響力を集約することによる、Power Vote の実現、各地大学での Campus Climate Challenge¹キャンペーン(以下、CCC)の推進等、広く学生の連携体制を構築するための働きかけを行っている。組織横断的なジョイントプロジェクトの企画や、学生向けスキルアップトレーニングの提案など、米国内で環境問題に取り組むユースにとってのパイプライン的な役割を果たしている組織である。

2. 取材背景

日本版 CCC 発足のきっかけとなったシンポジウムが POWER SHIFT 2009 であった。現 Campus Climate Challenge 実行委員会(以下、CCC 実行委員会)の発足人である北橋、小川、林ら3名が 2009 年 3 月の POWER SHIFT に日本から参加し、海外の青年らによる活動に刺激を受け、日本国内での CCC 運営組織の立ち上げに至った。POWER SHIFT 2011 においては、CCC ムーブメントの先駆であり先進国でもある米国内での、学内環境対策の参考事例、また最新のアイデアを収集するため、メンバーの派遣を行った。今回、CCC 実行委員会から参加したのは、牧瀬・山下の前述 2 名である。

¹ 正式名称は The Campus Climate Challenge。EAC の定義する同キャンペーンの内容は、(1) 各教育機関キャンパス運営におけるカーボンニュートラルの達成と再生可能エネルギーへの転換、および組織の経営方針に、前述の環境理念を採用させること。また (2) 学生に対する温暖化問題の教育の実施 となっている。

3. 取材目的

今回取材および上記 POWER SHIFT への参加の目的は以下の 3 点である。

① Campus Climate Challenge キャンペーンの実績事例の収集

米国では、これまで合わせて 700 以上の大学 (Universities and Colleges) が CCC に参加し、うち 550 の機関がカーボンニュートラルに向けての取り組み宣言を表明するに至っている。

POWER SHIFT のような国内を巻き込んだ大規模なキャンペーンが企画される一方で、米国内には Campus Climate Challenge を主導する役割を担う団体は複数存在し、CCC の手法は必ずしも同一でない。各大学 (あるいはその地域) の性格を考慮した課題分析、あるいは各キャンペーンのイニシアチブをとる組織の戦略に基づいて、様々なアプローチから展開されているという点で、多様性に富んでいる。これらの事例を収集し、日本国内に向けてのケーススタディーを作成することで、今後の CCC 推進の戦略に、より多面的な検討を加える。



Figure 1 大学でスピーチを行う学生

② その他学生アクティビティの情報収集



Figure 2 POWER SHIFT
リーダーシップトレーニング

全米から集まる環境に関心を持っている学生や環境 NGO に積極的にコミュニケーションを図り、彼らの最新のアクティビティについて情報を収集する。シンポジウムは内容が充実しており、組織のマネジメントについてのワークショップやディスカッションをはじめ、気候変動以外のテーマでは教育や女性の権利、移民政策、SNS の活用法など、100 種ほどのパネルディスカッションなど、同世代の多様な考え方を吸収することができる。日本帰国後、自組織におけるフィードバックのみならず、対外的に発信の可能なコンテンツが多い。

③ 米国学生活動家および活動団体とのネットワーク構築

POWER SHIFT 2011 は学生主催のアメリカでの環境シンポジウムとしては最大規模²である。そこに参加する環境 NGO や団体、通う大学で環境活動を行っている学生とのネットワークを作り、帰国後も継続的にコンタクトをとることで、相互の情報交換ができる基盤を作る。

4. 現地での活動内容

【Apr. 15th (1 日目)】

POWER SHIFT 初日は午後からの開始である。開催中に多くの学生と話す機会があったが、バスを 10 時間乗り継いで来たり、当日の早朝に家を出て参加したり、と全米中から参加者が集まっていた。それに配慮してのスケジュールと思われる。午後のプログラムは参加者のアイスブレイクを狙ってか、ラテン音楽に合わせて室内を歩きまわり、いろいろな人に自己紹介するというものだった。他にも 4 日間を通して、環境 NGO などがブースに出展し、広報活動を行っており、積極的にコミュニケーションを図



Figure 3 初日のアイスブレイキングの様子

²主催者発表による今回の参加者は全米 400 校、1 万人以上。

った。

夜にはアメリカ元副大統領で著書「不都合な真実」で知られるアル・ゴア氏が講演会を行った。主催者側のパフォーマンスもあり、参加者のボルテージは最高潮になった。ゴア氏は、現在の世界中における環境活動への取り組みの必要性と学生ができることから始めることの意義を述べた。

【Apr. 16th (2 日目)】



Figure 4
Regional Breakout Session

午前中は組織マネジメントについての講習会に参加した。ハーバード大学の学生によって運営されており、100 ページ以上にわたる冊子はすべてが手製であり、ベーシックなものから人材運営など多岐にわたる充実したものであった。1000 人ほどの参加者で規模も大きく、ワークショップの際は、同じ出身地域 15 人ほどの小グループとなり議論を交わした。出身地もさまざまに全米から学生が集まっていた。この組織マネジメントトレーニングの趣旨としては、同じ地区の大学同士、連携を取って共同のプロジェクトを立ち上げよう、学生活動を横断的に発展させよう、というものであった。Leadership Training という通り、ストラテジー/タクティクス の策定方法を勉強したのち、自身の所属する地区における体系的な活動プランに落とししていくのだが、大人数で座学的に戦略の勉強会をする様子はなかなか新鮮だった。



Figure 5 Workshop Session

午後は 100 種類にわたるテーマから、自分の興味・関心に合わせて 3 種類を選択し、ワークショップを行うスケジュールである。女性や子供の人権に関するパネル討論では、右の写真のように準備した席に収まりきらず、床に座り込む学生まで現れるほどの人気だった。NGO で活躍する専門家 4 名が、アフリカを中心とした途上国の女性と子どもの権利について統計を用いて解説した。他のパネル討論もあったがこのテーマがここまで盛況だったことから、人種のるつぼと呼ばれるアメリカに住む学生たちの関心の高さがうかがえた。他にも参加したワークショップを以下に簡単に挙げる。①Responsible Endowment Coalition (REC) (大学の資産投資に対するムーブメント。詳しくは後述)②Campus Climate Challenge2.0 (National Wildlife Federation によるキャンパスエコロジーの講習会)。スピーカーのダヤナンダ氏は日本で CCC が発足し活動していることを聞くと、非常に喜んでいた。

【Apr. 17th (3 日目)】

午前中は 2 日目と同じく組織マネジメントのディスカッションに参加した。午後は NGO "weatherize DC" の企画で、彼らの活動の広報に参加した。POWER SHIFT 2011 開催場所から地下鉄に乗り、ワシントン郊外の住宅地へ移動。それから割り振られた 30 の家を一軒一軒回り、活動の趣旨や実績を報告しパンフレットを渡し、賛同いただけたら署名を頂くという流れ。いきなり日本人が自宅を訪問し、片言の英語で説明をされても戸惑うだろう、と始めは心配していたが、温かい対応で、反応も上々であったので、良い経験をする事ができた。

【Apr. 18th (4 日目)】



Figure 7 デモンストレーション
開始前に集まる参加者

POWER SHIFT 2011 の最大の目玉である Action+Lobby day である。朝はワシントン市内の公園に参加者全員が集まり、アメリカ政府の気候変動への政策に対して参加者たちが主張を行った。この際、参加者全員がトレードマークとなる緑のフルメットを被る。会場の公園が緑一色の若者であふれかえる光景は圧巻である。アメリカのユースのモチベーションと環境への関心の高さに対して、改めてパワーを感じた。

その後、公園からホワイトハウスまでの約 2km の道のりを、歌を歌いながらマーチングを行う。POWER SHIFT 2011 開催中、アメリカと日本を比較することが頻繁にあった。日本ではこのシチュエーションではどうなるだろうか、参加者ユースに対してどのようなアプローチができるだろうか、などである。このように環境をテーマにして学生が 1 万人集まり、自分たちの主張を堂々と述べながら、マーチングするなんてことはあったらだろうか。もちろん両国の社会状況は異なるが、日本の学生も彼らのように同じく自分たちなりの考えを持ち、アクションを起こすことは不可能ではないと考えた。POWER SHIFT 2011 の開催を知らなかった一般市民は私たちの光景を見て、一様に驚いていたが、すれ違う人全員が好意的に捉えており、若者たちの主張を応援しているようにも捉えられた。



Figure 6 ホワイトハウスまでの行進



Figure 8
ロビー後、ホワイトハウスの前で

ホワイトハウスに到着してから午後は、5、6 人の各グループで担当の国会議員の議員室を回り、今回の POWER SHIFT 2011 開催の趣旨を説明し、気候変動政策への積極的な提言の協力を求めた。私たちは 3 人の国会議員を訪ねた。残念ながら 3 人とも不在で直接の対面はできなかったが、秘書の方に事情を説明し、とり回っていただいた。昨日午後に少し打ち合わせをして、グループのメンバー全員で協力して話を進めた。一緒に議員室を回った 4 人の学生たちはみな大学 1 年生であった。大学に入学したばかりの彼らがこのように POWER SHIFT に参加し、多くのことを経験し吸収して、1 年後 2 年後、各地域の大学の環境団体でリーダーシップを執っていくのだろう。大変緊張したが、非常に良い経験ができた。

5. 米国における取り組み事例

以下では、米国における CCC の取り組み事例及び USR をめぐる対策について、いくつかの事例を紹介する。

5-1. 組織における CCC 推進事例

(I) National Wildlife Federation



400 万人以上の会員を持つ、アメリカでも最大規模の自然保護団体。1989 年以降、20 年以上にわたって、キャンパスにおける環境教育の質向上の提案と、構内のエネルギー利用の持続性確保を主張する。

(a). 情報の発信・共有

・”Climate Edu”：グリーンキャンパスに関する情報サイトの運営。定期的なニュースレターの発行及びウェブキャストの提供をはじめ、キャンパス内環境対策に対する調査の実施・レポートの作成、様々なレビュー等を掲載している。

・”Campus Sustainability Case Studies”：大学キャンパス構内で実施された環境対策のオンラインデータベース(ケーススタディー)の作成および公開。1997 年以降、全米 200 以上の大学から取り組み事例を収集し、分析を加えている。

(b). 学生の活動への支援体制

・”Campus Ecology Fellowship”：自ら活動の企画を志す学生へ、アドバイザー(Project Advisor)・コーディネーター(Grant Processor, Program Coordinator)を選任し、企画立案・運営上のノウハウの提供や、助成金申請時には手続きの補助など、包括的な支援をおこなうプログラムを運営している。

・”Campus Chill Out”：学生活動、大学教職員の取り組み、あるいは組織としての大学の取り組みの中から応募を募り、一般投票の中から優れた内容を選出、表彰する。

事例 Campus-Wide Actions Category 部門受賞： *University of Arkansas* <アーカンサス大学>



Figure 9 アーカンサス大学のキャンパス

2021 年までに GHG 排出量を 2010 年基準で 50%削減、2040 年までにカーボンニュートラルを達成することを宣言。目標達成のための 25 のアクションプランを打ち立てた。研究室やパワーステーションへの高効率新設備の導入、食品廃棄物の削減努力により、年間 4,000,000 ドルの経費削減に成功。学内を走行する 18 台の自動車の燃油は、すべて食堂の排油を精製した代替燃料によって賄われている。

(II) SIERRA Student Coalition



EAC における CCC キャンペーンを提案した、組織のうちの一つ。100 を超える大学での CCC 成功例がある。ACUPCC (The American College & University Presidents' Climate Commitment ※詳しくは後述) に加盟した大学との活動連携も行っている。

・”Campus Organizer Training”

各参加大学学生の中から学内環境活動の学生リーダー”Campus Organizer”を選出し、課題分析の方法や、ステイクホルダーの巻き込み方など、プロジェクトマネジメントのノウハウを普及させるためのプログラムを運営。

・”Campuses Beyond Coal”

大学の使用するエネルギーのうち、石炭由来のものを完全に撤廃し、代わりに風力や太陽光など、再生可能なエネルギー創出への転換を呼びかけるキャンペーン。

事例 *Missouri University of Science and Technology*

学生による Beyond Coal キャンペーン展開後、大学所有の石炭発電所の閉鎖が決定された。併せて代替エネルギーとしての地熱発電への転換が表明され、これによって CO₂ 排出量は年間 2,5000t の削減、オペレーションコストは年間 280 万ドルの節減が期待されている。地熱システムの構築にかかる期間には 5 年間が見込まれ、設備投資における大学の資金調達額(Debt Finance)は 4 か所のキャンパス総額で約 2.6 億ドルと推定される。



Figure 10 キャンペーンへの参加を呼び掛けるポスター

(III) Campus Progress



現存する多様な社会問題に対して、学生の政治的・社会的な意見発信の機会を支援する。"Journalism, Activism, Events" の観点から、ローカルからナショナルレベルまで、大小さまざまな学生主動のアドボカシーキャンペーンを企画している。

- ・ **"Progressive Partnership"**: Campus Progress 戦略担当者による、学生活動家へのコンサルテーションの提供。アクションプラン立案、プロジェクトマネジメント段階での、スキルアップトレーニングの実施や、学生活動家同士・学生-企業間におけるネットワーク仲介も行う。
- ・ **"Campus Journalism Network"**: メディア戦略に特化したノウハウを提案する。Web サイトの作り方、アップグレードの仕方や、紙・電子両媒体での刊行物の作成、メディアリリースの仕方などを紹介している。活動資金の提供を行うこともある。

5-2. 大学における CCC 対策推進事例

Campus Sustainability Fund Initiative (SFI) ,Green Fee の導入

事例 *University of Washington* <ワシントン大学>

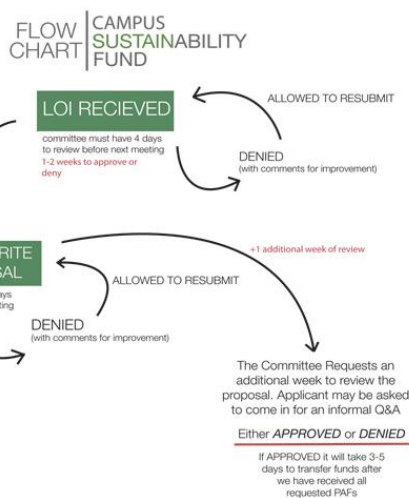


Figure 11 CSF の申請手続きフローチャート

生徒会の提案によって採択された、学生活動支援のためのキャンパスサステナビリティ基金 (Campus Sustainability Fund (CSF)) が 2010 年に実現し、ワシントン大学の全学生はグリーン税の納入義務を負うことになった。支払わなければならないグリーン税は一人あたり 1 学期につき 2.5 ドル。得られた収益は、学内の環境教育の拡充、学生の参加する環境活動への助成、より活発な環境活動を提起してもらうためのインセンティブとして使われる予定である。(今後システムへの理解が深まっていけば、さらに CSF の規模を拡大する可能性も示唆されている。) 環境活動への助成としてはプロジェクトの規模に応じて 250 ドルから、最大は 65,000 ドル以上の活動資金援助が受けられる。

学生のほか、大学スタッフによる申し込みも可能だが、プロジェクトには必ず学生が関わっていなければならない

ない。活動の評価軸は以下 4 点。1) Environmental impact (環境への貢献), 2) Student leadership and involvement (学生の関与および主体性), 3) Education and outreach (教育効果とアウトリーチ), 4) Feasibility (実現可能性)。

各プロジェクトへの支援としては資金援助のほかにも、学内機関の可能な限りの協力が約束されている。

The American College & University Presidents' Climate Commitment (ACUPCC)

ACUPCC は米国の大学・カレッジの学長から構成された、候変動問題への取り組みのためのネットワークであり、現在、米国全土から

670 以上の機関が参加している。気候中立(climate neutrality)

と持続可能性の実現のために、環境教育の実現、積極的な環境経営、

またそれら取り組みの社会への発信を進めている。ACUPCC に参加している機関はそれぞれ、温室効果ガスの排出インベントリの作成、気候中立をゴールに定めた直近 2 年間のマイルストーンの策定、環境教育のカリキュラムへの組み込みや、定期的な指針達成報告等が求められる。



5-3. その他 –USR 取り組み事例

Responsible Endowment Coalition (REC)



バーナードカレッジ、デューク大学らの学生によって始められた、大学の資産投資に対するキャンペーン。大学の資産の投資対象をより社会的・環境的に優れた内容のもの(グリーンエネルギーの創出事業やコミュニティーファンド等への出資)へと転換することによって、ハイリスクな資産の減少を防ぎ、継続的な財務リターンを確保できるように提案する。低減されたリスクによって得られた収益を、学生への教育や学内の設備投資に充てることによって、同時に大学の

ブランディングへとつなげることができる。

参加大学 *Stanford University*<スタンフォード大学>, *Duke University* <デューク大学>, *Columbia University* <コロンビア大学>, *Brown University* <ブラウン大学>, *Massachusetts Institute of Technology (MIT)*, *Harvard University*<ハーバード大学>等 全米 40 校以上

6. 所感

当日、会場であるコンベンションセンターに行き、10000 人という参加者の多さにまず驚かされ、同時に参加者と話してみても、今まで環境活動に関わったことのない学生が、かなり多くいることに気づき 2 重に驚かされた。POWER SHIFT は、そんなルーキーな学生活動家から、経験豊富な学生活動家までが一堂に会し、同じ時間と体験を共有しあうという点で、他に類を見ないものであるように思う。

それでもワークショップの議論の場になれば、経験の有無を問わずに活発な意見が飛び交い、全員が真剣に環境問題についての解決策を考える。実際にどれだけ策定したプランを具体化できるかよりも、その場で初対面の参加者同士が、会話やフィールドワークを通じて、お互いに触発された経験を持つことが貴重なのだと感じた。

CCCに限らず、海外の活動事例を見ていると、フラッシュモブ(デモンストレーション)の企画や、寮の Door to Door visit など、人の単発的な巻き込みに焦点を当てた、アクションプランが多くある。組織運営陣による継続的なコミットメントと、瞬間的な周囲の巻き込みを、バランスよく割り切って行うやり方が、効率的なイベントの運営と、多数のアクションの企画につながっているものと推測する。

CCC キャンペーンについて、米国大学内での使用エネルギーの具体的な削減手段については、カフェテリアの生ごみ削減や、照明の節減、放置自転車のリサイクルなど、日本の大学とそう相違なかった。しかしケーススタディーの共有・作成については、かなり進んでおり、今後の日本国内での横断的な情報共有にあたって是非参考にしたいと考えている。

以上。